

博士學位論文(要旨)

2006年9月

韓日の建国・王権神話における最高神  
としての天神・日神の比較考察

指導 倉澤幸久 教授

桜美林大学大学院

国際学研究科

環太平洋地域文化専攻

20142201

延 恩 株

# 目 次

1. 問題の所在と本論文の目的
2. 研究方法と先行研究
3. 本論文の構成と概要

## 序論

### 第1章 古代韓国の建国・王権神話に見る天神と日神

- 第1節 古朝鮮 — 韓国の史書『三國遺事』に見られる「壇君」神話
- 第2節 扶余・高句麗・百濟 — 中国史書や韓国史書に見られる「朱蒙」神話
- 第3節 新羅
  - 1-3-1. 朴氏の始祖神話 — その日神的要素
  - 1-3-2. 昔氏の始祖神話 — 箱船漂流と脱解
  - 1-3-3. 金氏の始祖神話 — 金の箱による降臨
  - 1-3-4. 伽耶の始祖神話 — 『三國遺事』の「駕洛國記」神話と『東國輿地勝覽』の伽耶山の女神「正見母主」神話

### 第2章 古代日本の建国・王権神話に見る天神と日神

- 第1節 天孫降臨神話 — 「駕洛國記」神話との類似性（『古事記』の「久士布流多気」、『日本書紀』の「添山峯」、「真床追衾」など）
- 第2節 神武天皇の東征（東遷） — 「日下」の戦いとニギハヤヒの日神的性格
- 第3節 八咫鳥 — ハンガリー建国神話や中国の文献に見られる鳥の先導
- 第4節 三輪山の日神信仰

### 第3章 古代新羅の延鳥郎・細鳥女伝説と古代日本の天日矛伝説

- 第1節 延鳥郎・細鳥女伝説 — 『新羅殊異傳』に見える大内氏渡来伝説
- 第2節 「都祈野」と日神信仰
- 第3節 天日矛の出自 — 阿加流比売の日光感精神話、蔚山出身の製鉄集団
- 第4節 天日矛とその一族の伝説 — 記紀や他の古書に見る日矛の日神的要素
  - 3-4-1. 日矛と天皇系の祭祀との結びつき
  - 3-4-2. タジマモリと「時じくの香の木の実」、『竹取物語』の「かぐや姫」伝説
  - 3-4-3. 丹塗矢伝説と出石乙女伝説

### 第4章 古代日本の民俗信仰における天神と日神

- 第1節 アマテラスと伊勢の日神信仰
  - 4-1-1. 伊勢の太陽崇拜 — 猿田彦
  - 4-1-2. 神島のゲーター祭
  - 4-1-3. 大和朝廷の朝日郎征伐伝説
  - 4-1-4. 『伊勢国風土記』逸文の伊勢津彦伝説

第2節 『おもろそうし』に見る琉球（沖縄）の日神「テダ（ティダ）」

第3節 タカミムスヒと対馬の日神信仰

4-3-1. 「顕宗紀」に現われた日神と月神

— 日神・月神の祖としてのタカミムスヒ

4-3-2. 対馬の阿麻氏留神社の祭神と高御魂神社の祭神

第5章 古代日本の建国神話の最高神としての、天之御中主神・高御産巢日神・天照大神

第1節 古代中国における「天」と天之御中主神

5-1-1. 古代中国の「天」と「太一」

5-1-2. 「天空神」としての天之御中主神

第2節 日本神話の最高神・皇祖神としての高御産巢日神と天照大神

— 日神か天神か

第6章 日神的天神の源流 — モンゴル系、ツングース系、トルコ系民族における

テングリ（天神）信仰

第1節 獣[狼]祖神話と壇君神話

第2節 モンゴル神話の日神、アラン=ゴア

第3節 ウイグル神話と伽耶（駕洛）神話との比較

結論

総説

一次資料

引用、および参考文献

辞典・事典

## 要 旨

本論文の目的は、古代韓国と古代日本の建国神話ないし王権神話に見られる、国家の最高神や始祖神としての、天神（M. エリアーデのいう「天空神」にあたる）と日神（エリアーデの「太陽神」）の比較研究をとおして、その特性を究明し、これによって、両国の文化的・政治的な位相や両国間の交流などをもっと広い視野で考える地平を提示することにある。

周知のように、古来、日本の皇祖神は天照大神（以下、アマテラスと略称）とされている。しかし『古事記』『日本書紀』を注意深く読むなら、建国の天皇、神武の東征（遷）神話において、高天原から司令を下す神はアマテラスだけではないことが分かる。司令神（この呼称は三品彰英による）には高御産巢日神（以下、タカミムスヒと略称）、ないしこれと同じ神とされる高木神がおり、司令はアマテラスかタカミムスヒが単独で下す場合も、両者が共同で下す場合も見られる。

このことは早くから民族学者の岡正雄によって指摘されたところである。岡は記紀のこの記述に注目して、南方的要素を持つアマテラスの王権神話のほかに、北方的なタカミムスヒの系統があり、日本の王権神話には両系統が複合していると考えた（岡正雄論文「日本民族文化の形成」＜『図説日本文化史大系』言叢社、1956年 所収＞）。

また著名な神話研究者、松村武雄も、タカミムスヒを主神とする天孫降臨神話にアマテラス神話が後で付加されたものと考えている（松村武雄著『日本神話の研究—個分的研究篇』培風館、1955年）。

近年、溝口睦子は『王権神話の二元構造』（吉川弘文館、2000年）を出版し、7世紀頃までの日本の皇祖神は一貫してタカミムスヒであり、律令制による中央集権体制が確立したとき、民衆の間ですでに広範囲に信奉されていたアマテラスに置き換えられた、と主張している。

従来、日本の古代史（建国期）の解明には韓日、ひいては東アジア圏全体を視野におさめる必要性が強調されている。また歴史学だけでなく民俗学・文化人類学・比較宗教学・比較神話学等からのアプローチも必要であるとされる。

本稿は、古代韓国、すなわち高句麗・百濟・新羅・伽耶の建国・王権神話における国家の最高神が、古代中国の「帝」（殷）や「天」（周）と微妙に異なることにまず注目する。『三国志』『後漢書』等の中国側の史料や、韓国側の史料『三國史記』（12世紀成立）『三國遺事』（13世紀成立）に見られる天神は、表面的には中国の天や天帝の観念の借用のように見えるが、けっしてこれと同一のものではない。それは韓国独自の要素を持っている。またその源流は、中国の天ではなく、むしろツングース族やモンゴル族の「テングリ」（Tengli、天神）にあるように思われる。

古代韓国の建国神話の最高神は、今まであまり指摘されなかったが、「天神」ではあるが、「日神」的な要素を兼ねそなえた天空神である。このことを古代の各地域の建国神話や国家祭祀の古記録から検証してみた。

一方、古代日本の神武天皇の建国神話を見ると、前に指摘した二重の司令神の存在のほかに、かなり多くの日神崇拝的要素が見られるという特徴を指摘しうる。そして本稿はこの要素を、アマテラスよりもむしろタカミムスヒに属するものとする。アマテラスは記紀神話が完成する頃に国家の最高神として導入されたものであり、皇祖神の原型はタカミムスヒにあるという主張である。

このタカミムスヒは高句麗・百済の天神ともきわめて近く、山上降下的な垂直型の天神であると同時に日神的要素もあわせもつものと見なされる。この点を本稿では、史料に即し、比較神話学や民俗学的な学説を援用して検証した。

それではアマテラスはどうなのであろうか。本稿はアマテラスを、古代日本の各地方、特に南伊勢で信仰されていたものが、ついには皇祖神に採用されるまでになった、海洋型の太陽神信仰の集約・発展として位置づける。アマテラスは伊勢地方で古くから信仰されていた伊勢固有の太陽神であることは、『日本書紀』の朝日郎征伐伝説あさひのいらつこ、『伊勢国風土記』逸文の伊勢津彦伝説、また猿田彦神話に照らして検証される。これらの人物はみな太陽神的要素を持っている。

韓日の古代の交流を考えるさいに、両国の間にあつて両国に最も近接する対馬の古代史は本稿の考察にとって不可欠の要素となる。対馬には天童神（天道神）の信仰が根強く残り、阿麻氏留神社あまてるや高御魂神社（祭神はタカミムスヒ）がある。阿麻氏留というアマテラスがすぐに思い浮かぶが、実はこの阿麻氏留が対馬ではタカミムスヒに結びついているのである。それは『日本書紀』「顕宗天皇」3年条に明らかである。そこでは「日神」が人にかかつて日神自身の祖神であるタカミムスヒに大和の磐余（〔神武〕天皇の領地）の田を献上するように託宣したとある。そのとき対馬の役人がこの日神の祖、すなわちタカミムスヒを祭っている。これは大陸や韓半島（朝鮮半島）から伝わって来た天神型の日神または日神的な天神が皇室に入り込んだ一つのケースと考える根拠となりうる。

日神信仰を考える場合、『三國遺事』に収載された古代新羅の延鳥郎・細鳥女伝説ヨノラン セオニョと記紀の天日矛あめのひぼこ（以下、アメノヒボコと略称）伝説も見落とせない。延鳥郎・細鳥女伝説には、古代新羅王室が韓半島の東端、迎日湾で日神と月神を祭ったことや、日月の精の象徴である延鳥郎とその妻細鳥女が日本に渡ったということが記されている。またアメノヒボコは、従来から日神を信仰する新羅ないし伽耶（駕洛）からの渡来集団の人格化と解釈されているが、本稿では記紀のみならず『播磨国風土記』なども参照して、この日神信仰の特殊な性格の位置づけを試みた。

以上の考察をとおして本稿では改めて、古代日本の建国神話における、国家の最高神、とくに天之御中主神（以下、アメノミナカヌシと略称）・タカミムスヒ・アマテラスの特質を、天神・日神の幾つかの類型に即して探究した。

アメノミナカヌシは『古事記』冒頭にのみ出て来る、中国の天に由来する、いわば抽象化された最高神である。古代日本ではこの神を北極星や「太一」として皇室で祭った記録もあるが、これは

中国の天神そのものの移入と言ってよいと思われる。これは皇祖神として定着することはなく、その祭祀もずっと後世になってからである。

アマテラスは、その起源をたどれば、海洋型・水平軸型の日神と考えられ、この型の日神としては、新羅の延鳥郎・細鳥女伝説の日神やアメノヒボコ伝説の日神と共通する側面を有すると思われる。また琉球（沖縄）の「テダ（ティダ）」も挙げることができよう。タカミムスヒは、前述のように、山上降下型の天神であり、それはモンゴル・ツングース・トルコ系民族のテングリにルーツを有すると思われる。これら北方系の天神は中国の天神と同一ではない。なぜならこれはたんなる天神ではなく、日神的要素もあわせもつ天神だからである。たとえば、周の祖である后稷<sup>こうしよく</sup>の生誕神話を見ると、彼の母親は巨人の足跡に感精して后稷を生んだとされている。また伝説上の天子、黄帝<sup>けんえん</sup>（軒轅）や殷の始祖契<sup>けい</sup>の生誕神話を見ても、その母親を懐妊・感精させたのは稻妻や「玄鳥」の卵であって、けっして日光ではない。ところが高句麗・百済・新羅・伽耶の始祖生誕神話では日光・日精感精が主流になっている。さらにモンゴルの天神は日と月を含む天神という側面が強いが、中国の天はむしろ「太一」と呼ばれる北極星によって象徴される。

以下、本稿の構成を概説する。

まず、序論では、M.エリアーデの「天空神」「太陽神」の概念を取りあげ、本論文のキーワードである「天神」と「日神」の基礎概念を明確にした。

エリアーデのいう「天空神」と「太陽神」は、東アジアの宗教や神話においても存在するはずであり、これが本稿の「天神」「日神」の基本的な概念である。むろん、エリアーデのシャーマニズムの定義でも見られることであるが、彼の概念規定ではとらえきれない側面が東アジア特有の天神・日神の特性にもあると思われる。

第1章では、古代韓国の建国・王権神話に見る天神と日神を扱い、最初に、壇君<sup>タンガン</sup>（檀君とも表記）神話を取りあげた。この神話は現在、韓国の人びとに最もよく知られた「古朝鮮」の建国神話である。次に扶余・高句麗・百済の建国神話を取りあげた。この3つの国は必ずしも同一の部族や民族ではないが、支配層は扶余族であり、彼らが王権をもっていた。そこには東明（朱蒙）という王がいた。そのため神話もだいたい共通する。また、古代新羅の建国神話を取りあげた。この地域は朴・昔・金の3氏の別々の神話が重層している。各氏の始祖神話を別々に詳しく分析して、天神と日神の要素を取り出してみた。続いて、いわゆる伽耶または駕洛の建国神話を見てみた。『三國遺事』には「駕洛國記」が収録されている。ここには特に日本の天孫降臨神話に類似したモチーフが見られる。建国王の首露が中に入って降りて来たという紅い布に包まれた小箱と、日本の「真床追衾」<sup>まじこおうふすま</sup>と

の関係とか、『古事記』に述べられるクジフルソホルの峯への降臨、<sup>からくに</sup>韓国に向かい朝夕の日が美しいところ等々の、韓半島との関係が示唆されている。

その結果判明したことは、古代韓国の建国・王権・始祖神話に現れる天神の観念は、古代中国のいわゆる「天」の観念とかなり異なった性格のものであり、天神の観念には、必ずしも明確な形ではないとはいえ、太陽神つまり日神的要素が分かちがたく結びついているという事実である。むしろこれは、日本のアマテラスのような明白な日神ということではない。筆者は古代韓国の建国神話に底流する日神の観念を「日神的天神」と理解する。これが日本の建国・王権・皇祖神話になると日神的要素がさらに優勢になって、いわば「天神の日神」と呼びうるものとなってゆく。

第2章では、古代日本の建国・王権神話に見る天神と日神の考察である。日本の建国神話は言うまでもなく神武天皇の東征（遷）神話である。山上への降臨から大和へ侵入して王権の基礎を固めるまでを記紀に即して詳しく述べ、ここに現れる神武一族のさまざまな日神信仰の要素を明確にした。

この章で特に注目したのは、ナガスネヒコとの<sup>くさか</sup>日下での戦いで、神武天皇は「我は日神の子孫」、また神武の兄、<sup>いなひのみこと</sup>稲飯命は熊野の海上で暴風に遇ったときに「吾が祖は天神、母は海神なり」と言っている。ここでは、韓国の朱蒙神話（「我是天帝子 河伯外孫」「我是日子 河伯外孫」）のように、日神なのか天神なのか、あいまいになっている点が注目できよう。また父が日神（ないし天神）、母が海神というのは、高句麗や新羅の神話と同じパターンである。また、神武東征時に道案内をした<sup>やたのからす</sup>八咫鳥、新羅の昔氏神話に出てくるカササギなど、<sup>みさきがみ</sup>先導神の問題も日神との関係で論じてみた。<sup>からす</sup>鳥は太陽神と古来大いに関係がある。

第3章では、古代新羅の延鳥郎・細鳥女伝説と古代日本の天日矛伝説を取りあげた。延鳥郎・細鳥女伝説は太陽信仰、しかも海洋型の太陽信仰が古来、新羅に存在したことを示している。古代新羅の王室は迎日湾周辺で日月祭祀を行っており、日月池などの遺跡も残っている。なおこの伝説は『三國遺事』に載っているが、実は9世紀に出された<sup>チュチュオン</sup>崔致遠の『新羅殊異傳』が初出であった。ここでは延鳥は「迎鳥」となっている。延は迎と同義であり、第2章にも述べたとおり、鳥は太陽を表し、迎日つまり日の出を迎え礼拝するという意味である。

アメノヒボコ伝説（ツヌガアラシト伝説もあるが、これはアメノヒボコ伝説と大部分重なっている）は、韓日間の古代の政治的・文化的交流の一つの集約的な説話と言える。渡来人でありながら「天（あめ）」を冠して<sup>あま かみ</sup>天つ神系であるのも、さらには日矛という日神祭祀を表すような名前も、こ

の人物（ないし人物で象徴される集団）がけっして無視できない、何か大きな力を古代日本に及ぼしたことを暗示している。

アメノヒボコが瀬戸内海にも日本海にも大きな力をもち、出雲の神オオナムチ（大国主神）と戦ったこと、また後世に新羅を攻めたという神功皇后の祖先となっていることなど、ここから非常に豊かな比較研究が引き出せたと思う。

第4章の古代日本の民俗信仰における天神と日神では、前半を伊勢の日神信仰とアマテラスを、後半を対馬の日神信仰とタカミムスヒというテーマで論じた。さらに、琉球（沖縄）の『おもろそうし』に現れる太陽神「テダ（ティダ）」についても、一連の海洋型の日神とどのように関わるのかを考察した。

アマテラスが太陽神であり皇祖神であるということは常識である。しかし、この日神が本当に最初から皇祖神であったのかについては、ずっと疑義が呈されている。最近の学説は、アマテラスが伊勢神宮の内宮に祭られたのは7世紀頃だろうということで、ほぼ一致している。本稿は、なぜアマテラスが伊勢に祭られたのかという理由を、伊勢には以前から海洋型の太陽信仰が盛んで、元来、日神的要素をもっていた皇祖神を、大和から見て東に位置する伊勢へ朝廷が祭ったためと説明する。ここでは、原アマテラス信仰ともいべき南伊勢地方の日神信仰を、猿田彦伝説、伊勢津彦伝説、朝日郎征伐伝説、神島のゲーター祭の中に見出した。

後半では、対馬の日神信仰とタカミムスヒの関係を論じた。高天原の「司令神」にはアマテラスとタカミムスヒ（一名、高木神）が存在したが、『日本書紀』の「あへのおみことしる顕宗天皇」条の阿閉臣事代に憑依したという日神と月神の託宣事件は重要である。ここでタカミムスヒは「日と月の祖」おや「天地ようぞう鎔造の神」と呼ばれている。また朝廷は、この事件のさい対馬出身の神祀官を重んじている。

この章ではさらに、対馬の「阿麻氏留神社」と「高御魂神社」の2社に注目し、これらの神社の祭神がタカミムスヒであり、「天地鎔造」の天〔空〕神でありながらも、また日おやの祖として日神的要素もあわせもつことを検証した。

第5章では、古代日本の建国神話の最高神としての「あめのみなかぬし天之御中主神」「たかみむすひ高御産巢日神」「あまてらす天照大神」の3神を取りあげ、古代中国や韓国の民族・国家の最高神・始祖神と比較して、その特性を明らかにした。いくつかのポイントを述べると、アメノミナカヌシは宇宙の中心の神という意味のとおり天神と思われる。しかしこの神は、かなり後世に中国の天〔神〕の思想が伝わったものと考えられ、抽象的・観念的な天神と思われる。

アメノミナカヌシは後世において、「太一」という北極星の神と同一視されたり、仏教の妙見信仰

と結び付いた。天の星宿が北半球では北極星（正確には、天の北極）を中心に回るのは天文学的な事実であるから、この宇宙の最高神が北極星を祭った中国の天の信仰に由来しているのは明らかである。

タカミムスヒは一般に「ムスヒ」の神とする説があり、<sup>たいぐうしん</sup> 対偶神の<sup>かみむすひ</sup> 神産巢日とともに生成や造化の神とされている。しかしタカミムスヒには、「高木神」という別名があり、高い木に天から降りて来る神といったイメージを有するだけでなく、日神・月神の祖としての「日神的天神」という特徴もある。

またタカミムスヒは、アメノミナカヌシとちがって高天原での活動が記されているだけでなく、『姓氏録』にはその子孫もかなり記され、この神を祭る古社も少なくない。しかし本稿が何よりも主張したのは、この神の日神的性格であり、また古代韓国の諸国の建国神・始祖神との構造的な類似性である。すなわち聖なる山上や樹林への天からの降臨や日光感精である。この章では多くの側面からこの神の特性を探ってみた。

アマテラスは普通、天を照らす太陽神であると考えられ、天に照るのは太陽であることに疑問をいだく人は少ないが、『万葉集』などに「天照る」月という表現もあり、天を照らすのは星でもあるから、アマテラスが本当に太陽神なのかという問題も無視できない。また日本語では海のことアマと言うので、当然アマテラスが海のアマと関係していたのかもしれないという問題も生じてくる。事実、天日矛は『古語拾遺』では<sup>あまのひほこ</sup>「海日槍」と表記されている。また大和の三輪山へやって来たオオナムチの分身（<sup>さきみたま</sup> 幸魂、<sup>くしみたま</sup> 奇魂）である大物主神は、『日本書紀』には<sup>あや</sup>「神しき光が海を照らし、浮かび来る者あり」と記され、三輪山の神の海洋性が暗示されている。

第6章では、日神的天神の源流と考えられるモンゴル系、ツングース系、トルコ系民族におけるテングリ（天神）信仰について考察した。古代韓国や日本の、建国の始祖たちの山上降臨や日光感精に代表される天神を「日神的天神」と性格づけ、その源流を探ってみた。そこでは、北方の遊牧民、匈奴の君主である単于の太陽崇拜や、契丹君主の太陽を拜む即位儀礼などに注目した。また、チンギス=ハーン（ジンギス=カン）の祖先であるアラン=ゴアの、夜ごとに通って来た「光る黄色い人」が彼女の腹をさすり、その光を腹の中へ入れたことによる懐妊という、典型的な感精神話などを取りあげた。また伽耶（駕洛）の建国神話に似ているウイグルの神話も取りあげて、日神的な天神という、韓国の建国の始祖たちの神やタカミムスヒの源流を探究した。

最後に、本稿では、「天之御中主神」「高御産巢日神」「天照大神」の三神を中核として、以下のよ  
うな分類を一つの作業仮説として提起した。

まず、中国の天や、天之御中主神は、ある意味で典型的な「天空神」であるので、天神Aとした。  
これは、太一や北極星などとも係わるが、天の中心（一天の北極には特定の星はなく、北極星すら  
天の北極を周回している）である太極を注視する天神信仰は、厳密に言えば星辰信仰とは無縁であ  
る。王権と結び付くときは、「感精帝」としての天子と係わるが、本質的に日光感精ではない。古朝  
鮮の壇君と日本神話の国土の創造神、イザナギ・イザナミはここに分類することができよう。

天空神でありながらも、日光感精や、その他の太陽との何らかの係わりを示すさまざまな要素を  
有する神は、天神Bとし、これを日神的天神と命名した。扶余・高句麗・百済の朱蒙（東明）、新羅  
の赫居世、伽耶（駕洛）の首露、モンゴル・ツングース・トルコ系のテングリ、そしてタカミムス  
ヒなどがこれに属する。

筆者は自然の太陽への眼差しが日神信仰の原点だと考える。海、陸、また陸上でも平野と山地で  
はおのずと太陽はちがって見える。朝日、夕日がいちばん美しく見えるのは、やはり海上であろう。  
よって海洋型日神に近づけば近づくほど、天神から遠ざかると考える。これを日神Aとし典型的な  
日神とした。伊勢の原アマテラス、延鳥郎・細鳥女、沖縄の「テダ（ティダ）」などがこれに分類し  
うる。日神Bは、天神的要素をあわせもちつつも、本体は海洋型の日神を指す。これを天神的日神  
と呼ぶ。例えば、アメノヒボコは意呂山（現在の蔚山<sup>ウルサン</sup>に比定されている）へ降下したのち、製銅な  
いし製鉄を行いつつ航海術を巧みに操<sup>あやつ</sup>って海上を移動しているから、このタイプに属する。皇祖神  
アマテラスは、高天原つまり天界の司令神・統治者となったときは日神Bとなるであろう。また三  
輪山の太玉主神もこれに入れてよいであろう。以上をまとめると次表のようになる。

### 【天神・日神の分類：A・Bタイプ】

天神A	天空神	中国の天 古朝鮮の壇君 天之御中主神 イザナギ・イザナミ
天神B	日神的天神	扶余・高句麗・百済の朱蒙（東明） 新羅の赫居世 伽耶（駕洛）の首露 モンゴル・ツングース・トルコ系のテングリ タカミムスヒ

日神A	日神	延鳥郎・細鳥女 沖縄の「テダ（ティダ）」 伊勢の原アマテラス
日神B	天神的日神	アメノヒボコ 三輪山の太玉主神 皇祖神アマテラス

さて、本稿全体を通じて検証しえた本稿の主張をまとめると以下ようになる。

第一に、古代韓国の建国ないし王権神話の始祖神または最高神は、中国の殷・周・秦の建国の始祖神ないし最高神とは異なるということである。古代中国では、「天」や「帝」といった天空神を最高神として以来、清朝に至るまでもその位置づけを変えることがなかった。これはエリアードも指摘しているとおりである。しかし古代韓国では、日光感精神話や、本稿で指摘したその他の日神がうかがえる。とはいえ内容的にも、表現の仕方とあわせて、韓国の建国神はなお中国的な天神の概念を色濃く内包していた。本稿はここから、中国神話の最高神を「天神」と呼び、韓国のそれを「日神的天神」と呼ぶ。「日神的天神」とは、天神（「天空神」）でありながらも、日神（「太陽神」）的要素をそなえている天神という意味である。

第二に、韓国の最高神も時代と地域で徐々に変容を遂げたということである。とりわけ新羅の神話には、箱船漂流型神話とともに海洋型の日神神話が見られる。延鳥郎・細鳥女伝説と後世の新羅王室の日神祭祀は、あきらかにこの傾向を物語る。

日本の天日矛伝説は、日光感精と海洋型日神の要素を兼備した、ある意味で混成型の日神神話である。アメノヒボコを本稿は「天神的日神」に分類する。すなわち太陽神的要素が主体になる天神という観点である。

第三に、日本は半島である韓国と較べて、海との接触の度合いが多いために、各地で素朴な自然神としての、また文化神、人格神としての太陽崇拝や祭祀が多くなされたという指摘である。これが最終的に国家の最高神アマテラスに結実したのも偶然ではないだろう。したがって本稿は、原アマテラスを純粋な「日神」に、そして皇祖神アマテラスを天神的日神に位置づける。

第四に、序論で述べたようにエリアードは、古代メソポタミアの天空神「アン」が「ひまな神」となって万神殿の奥深くにひきさがったとき、太陽神マルドゥークが最高の国家神として顕現し、民衆の圧倒的な崇拝を受けたというが、このことは、記紀で最初に表記された「天神」「皇天神」「皇祖天神」がしだいに姿を消し、アマテラス一色に収束していく事態と対応するであろう。日本神話固有の「アン」神を探すなら「天之御中主神」がこれに相当しよう。これは後世に付加された

神だが、これが『記』に登場するのは民衆の側にそれなりの統一神への要求が無意識（一般に多神教の場合、人間の、あるいは民族の心の中に一つの神 —それは唯一神でなくとも、ギリシアなら主神ゼウスのようなものでもよい— にしぼりたいという無意識的要求があるのではないかという考え）にせよあったからだと思われる。しかしこの神は具体的にほとんど祭られなかった。これは後年、仏教の妙見信仰や道教と習合して北極星の神となったが、北極星は天の中心と考えられたので、本来的には「天神」に分類できるであろう。日神アマテラスが長い過程を経て日本の最高神に変容したことは本論で詳説した。一般に、太陽神が国家の最高神となるのは、古代エジプトやマヤを除けば、けっして多くの実例があるわけではない（本稿は第5章で古代エジプトの太陽神信仰にも言及した）。

以上のように本稿では、民族や国家の最高神としての天神と日神の考察を中心にして、歴史学・民俗学・文化人類学・比較宗教学・比較神話学などの諸学説を援用しながら、史料に即して韓日（中国や中央アジアも含む）の建国・王権神話の基本的な特性を明らかにした。そしてこれによって、韓日、ひいては環太平洋地域全体の文化・歴史・政治・社会を考えるための、より広い視野を切り拓いたと思う。今日、韓日間では近・現代史の研究は盛んである。そこにはしばしば解明し切れない問題も生じている。視点を古代に向けて、そこでの文化交流を掘り出してみることは、決して無駄ではないはずである。今後、この研究成果が東アジアの文化交流の分野に何らかの刺激を与えるなら、筆者の努力は大いに報われるであろう。

## 総 説

Mircea Eliade, *Traité d'Histoire des Religions* (Paris, Payot, 1968), ミルチア・エリアーデ著『太陽と天空神 (宗教学概論 1)』エリアーデ著作集 (第一巻) 久米博訳 (せりか書房、1974 年)

Mircea Eliade, *Histoire des Croyances et Idées Religieuses*, I ~ III (Paris, 1976~1983), ミルチア・エリアーデ著『世界宗教史』(全 3 巻) 荒木美智雄他訳 (筑摩書房、1991 年)

## 一 次 資 料

### 【韓国資料】

『三國史記』金富軾著、1145 年 (奎章閣図書館蔵)

『三國史記』金富軾著、影印本 (古典刊行会、1932 年)

『三國史記』(上下) 金富軾著、 訳 ( 、1998 年)

『三國史記』(上下) 金富軾著、李丙燾訳 (乙由文化社、1983 年)

『完訳 三國史記』金富軾著、金思權訳 (明石書店、1997 年)

『三國遺事』一然著、1281~1283 年 (奎章閣図書館蔵)

『三國遺事』一然著、影印本 (古典刊行会、1932 年)

『三國遺事』(上下) 一然著、李載浩訳 ( 出版社、1997 年)

『完訳 三國遺事』一然著、金思權訳 (明石書店、1997 年)

『朝鮮王朝寛録 (世宗莊憲大王寛録)』1418~1450 年 (奎章閣図書館蔵)

『東國輿地勝覽』1481 年 (奎章閣図書館蔵)

『新增東國輿地勝覽』 著、影印本 (東國文化社、1964 年)

『筆苑雜記』徐居正著、1420~1488 年 (国立中央図書館蔵)

『譯註 殊異傳逸文』 他共訳 ( 、1996 年)

『帝王韻記』李承休著、影印本 (朝鮮古典刊行会、1939 年)

『東國李相國集』李圭報著、影印本 (東國文化社、1958 年)

『朝鮮上古史』(上下) 申采浩著、影印本 (鐘路書院、1948 年)

『海東諸國紀』申叔舟著、1471 年 (奎章閣図書館蔵)

『海東諸國紀—朝鮮人の見た中世の日本と琉球—』申叔舟著、田中健夫訳注 (<岩波文庫>岩波書店、1991 年)

### 【日本資料】

『古事記』倉野憲司校注 (<岩波文庫>岩波書店、1963 年)

『古事記』(上中下) 次田真幸校注 (講談社、1977 年)

『日本書紀』(全 5 冊) 坂本太郎・井上光貞他校注 (<岩波文庫>岩波書店、1994~1995 年)

『日本書紀』(上下) 宇治谷孟全現代語訳 (<講談社学術文庫>講談社、1988 年)

『続日本紀』(上中下)、宇治谷孟訳 (<講談社学術文庫>講談社、1992~1995 年)

- 『古語拾遺』西宮一民校注（＜岩波文庫＞岩波書店、1985年）
- 『先代旧事本紀』（神道大系 古典編）財団法人 神道大系編纂会編（神道大系編纂会、1980年）
- 『新撰姓氏録』（神道大系 古典編）財団法人 神道大系編纂会編（神道大系編纂会、1983年）
- 『風土記』吉野裕訳（＜東洋文庫＞平凡社、1969年）
- 『神皇正統記』岩佐正校者（岩波書店、1975年）
- 『万葉集』（上下）佐々木信綱編（岩波書店、1927年）
- 『懐風藻』辰巳正明編（笠間書院、2000年）
- 『竹取物語』坂倉篤義校訂（＜岩波文庫＞岩波書店、1970年）
- 『おもろさうし』（全2冊）外間守善校注（＜岩波文庫＞岩波書店、2000年）

## 【中国資料】

- 『日韓古代史資料』太田亮編著（磯部甲陽堂、1928年）
- 『三国史記倭人伝—朝鮮正史日本伝—』佐伯有清編訳（＜岩波文庫＞岩波書店、1988年）
- 『東アジア民族史—正史東夷伝』（全2巻）井上秀雄他訳（＜東洋文庫＞平凡社、1974年）
- 『新訂 旧唐書倭国日本伝 他二編—中国正史日本伝—』石原道博編訳（岩波書店、1956年）
- 『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝宋書倭国伝・随書倭国伝—中国正史日本伝—』石原道博編訳（岩波書店、1951年）
- 『漢書・後漢書三国志列伝選』（中国の古典シリーズ）本田濟編訳（平凡社、1973年）
- 『戦国策（劉向編）・国語（抄）・論衡（抄）（王充著）』（中国古典文学大系 全60巻の第7巻）常石茂・大滝一雄訳（平凡社、1972年）
- 『漢・韓史籍に頭はれたる日韓古代史資料』太田亮編著（磯部甲陽堂蔵版、1928年）
- 『莊子内篇』森三樹三郎訳注（＜中公文庫＞中央公論社、1974年）
- 『山海経』高馬三良訳（＜平凡社ライブラリー＞平凡社、1994年）
- 『モンゴル帝国史』（全6巻）ドーソン著、佐口透訳注（＜東洋文庫＞平凡社、1968年）
- 『元朝秘史』（上下）小澤重男訳注（岩波書店、1997年）
- 『史記』（上下）司馬遷著、野口定男他訳（平凡社、1972年）
- 『詩経』目加田誠訳（＜講談社学術文庫＞講談社、1991年）

## 引用、および参考文献（a～c順）

- 網干善教・石野博信他共編者『三輪山の考古学—大和王権発祥の地から古代日本の謎を解く—』（学生社、2003年）
- クロード=カトリーヌ・ラガッシュ、ジル・ラガッシュ(Claude-Catherine & Gilles Ragache)著『狼と西洋文明』高橋正男訳（八坂書房、1989年）
- 江上波夫・大野晋共編者『古代日本語の謎』（毎日新聞社、1973年）川副武胤著『日本神話』（読売新聞社、1971年）
- ジル・ラガッシュ(Gilles Ragache)著『オオカミと神話・伝承』高橋正男訳（大修館書店、1992年）
- ジャン・ヴェルクテール著『古代エジプト』大島清次訳（＜文庫クセジュ＞白水社、1960年）
- 原山煌著『モンゴルの神話・伝説』（東方書店、1995年）

橋本進吉著『古代国語の音韻に就いて』他二編（＜岩波文庫＞岩波書店、1980年）  
ヘンドリック・ハメル著『朝鮮幽囚記』生田滋訳（＜東洋文庫＞平凡社、1969年）  
肥後和男著『日本神話研究』（河出書房、1938年）  
肥後和男著『日本の神話』（雪華社、1968年）  
弘末雅士著『東南アジアの建国神話』（山川出版社、2003年）  
福島秋穂著『紀記の神話伝説研究』（同成社、2002年）  
フランソワ・ドマ著『エジプトの神々』大島清次訳（＜文庫クセジュ＞白水社、1966年）  
今西龍著『朝鮮古史の研究』（国書刊行会、1970年）  
井上秀雄著『倭・倭人・倭国』（人文書院、1991年）  
井上秀雄著『古代アジアの文化交流』（溪水社、1993年）  
井上秀雄・旗田巍共編者『古代日本と朝鮮の基本問題』（学生社、1974年）  
井上光貞著『日本の歴史1—神話から歴史へ—』（＜中央文庫＞中央公論社、1973年）  
井上辰雄論文「菊池川流域の古代祭祀遺跡—岩倉と隠りの穴—」（『東アジアの古代文化』大和書房、  
1975年 初夏号 所収）  
井上辰雄論文「太陽祭祀と古代氏族—日置部を中心として—」（『東アジアの古代文化 特集 日本古  
代の太陽祭祀と方位観』大和書房、1980年 夏号 所収）  
石野博信・森浩一他編者『三輪山の考古学—大和王権発祥の地から古代日本の謎を解く—』（学生社、  
2003年）  
伊藤清司著『昔話 伝説の系譜—東アジアの比較説話学—』（第一書房、1991年）  
伊藤清司著『中国の神話・伝説』（東方書店、1996年）  
出石誠彦著『支那神話と傳説の研究』（中央公論社、1943年）  
J.G.Frazer 著『図説 金枝篇』山内昭一郎他訳（東京書籍、1994年）  
梶村秀樹著『朝鮮史』（＜新書東洋史＞講談社、1977年）  
角林文雄著『倭と韓—邪馬台国の源流を探る—』（学生社、1983年）  
角川書店編『竹取物語』（＜角川ソフィア文庫＞角川書店、2001年）  
片桐洋一他校注・訳者『竹取物語』日本古典文学全集8（小学館、1972年）  
門脇禎二著『日本海域の古代史』（東京大学出版会、1986年）  
上垣外憲一著『倭人と韓人』（＜講談社学術文庫＞講談社、2003年）  
上山春平著『神々の体系』（＜中公新書＞中央公論社、1972年）  
『国文学 解釈と鑑賞—日本神話＜始原と展開＞』第42巻12号10月号（至文堂、1977年）  
笠井倭人著『古代の日朝関係と日本書紀』（吉川弘文館、2000年）  
久保田淳・大曾根章介他共校注者『中世日記紀行集』（岩波書店、1990年）  
濱田耕策著『新羅国史の研究—東アジア史の視点から—』（吉川弘文館、2002年）  
李家正文著『魏志倭人伝の虚構と真実』（泰流社、1989年）  
前田晴人著『神功皇后伝説の誕生』（大和書房、1998年）  
馬淵和夫他校注・訳者『今昔物語（四）』日本古典文学全集24（小学館、1976年）  
マルコ・ポーロ著『東方見聞録』愛宕松男訳（＜東洋文庫＞平凡社、1970年）  
松前健著『日本神話の形成』（塙書房、1970年）

- 松前健著『日本の神々』（＜中公新書＞中央公論新社、1974年）
- 松前健論文「日本古代の太陽信仰と大和国家」（『季刊 東アジアの古代文化』大和書房、1980年夏号 所収）
- 松前健論文「古代日本人の信仰と祭祀」（『日本古代の太陽信仰と大和国家』大和書房、1997年 所収）
- 松本信広論文「神話伝説」（『解釈と鑑賞 別冊 現代のエスプリ 日本国家の成立を語る説』（至文堂、1971年 第9巻49号 所収）
- 松村一男著『女神の神話学 処女母神の誕生』（＜平凡社選書＞平凡社、1999年）
- 松村一男・渡辺和子共編著『太陽神の研究（上巻）』（リトン、2002年）
- 松村武雄著『民族性と神話』（培風館、1934年）
- 松村武雄著『日本神話の研究一個分的研究篇（下）』全3巻（培風館、1955年）
- 三上鎮博論文「山陰沿岸の漂着文化」（『東アジアの古代文化 特集 古代の日本の新羅系文化』大和書房、1974年 秋号 所収）
- 三品彰英著『日本神話論』（第一巻）三品彰英論文集（平凡社、1970年）
- 三品彰英著『建国神話の諸問題』（第二巻）三品彰英論文集（平凡社、1971年）
- 三品彰英著『神話と文化史』（第三巻）三品彰英論文集（平凡社、1971年）
- 三品彰英著『増補 日鮮神話伝説の研究』（第四巻）三品彰英論文集（平凡社、1972年）
- 三品彰英著『古代祭政と穀霊信仰』（第五巻）三品彰英論文集（平凡社、1973年）
- 三田村泰助論文「朱蒙伝説とツングース文化の性格」（『古代の朝鮮と日本—その建国伝承と関連性』現代のエスプリ No.107、至文堂、1976年 所収）
- 宮下豊著『但馬国から邪馬台国へⅢ』（新人物往来社、1994年）
- 溝口睦子著『王権神話の二元構造—タカミムスヒとアマテラス—』（吉川弘文館、2000年）
- 水野祐著『日本古代の国家形成』（＜現代新書＞講談社、1967年）
- 水野祐著『日本神話を見直す』（学生社、1996年）
- 森浩一著『日本神話の考古学』（＜朝日文庫＞朝日新聞社、1999年）
- 護雅夫著『遊牧騎馬民族国家』（＜講談社現代新書＞講談社、1967年）
- 護雅夫著『古代遊牧帝国』（＜中公新書＞中央公論社、1976年）
- 武藤正典論文「若狭湾とその周辺の新羅系遺跡」（『東アジアの古代文化 特集 古代の日本の新羅系文化』大和書房、1974年 秋号 所収）
- 長野正著『日本古代王権と神話伝説の研究』（講談社出版サービスセンター、1985年）
- 永留久恵著『海神と一天神—対馬の風土と神々—』（白水社、1988年）
- 永留久恵著『対馬古代史論集』（名著出版、1991年）
- 永留久恵論文「古代日本人の信仰と祭祀」（『神と王とト宮』大和書房、1999年 所収）
- 直木孝次郎著『日本神話と古代国家』（＜講談社学術文庫＞講談社、1990年）
- 野尻抱影著『星の神話・伝説』（＜講談社学術文庫＞講談社、1977年）
- 大林太良編『世界の神話』（日本放送出版協会、1976年）
- 大林太良著『神話の系譜 日本神話の源流をさぐる』（＜講談社学術文庫＞講談社、1991年）
- 大林太良著『北の神々 南の英雄—列島のフォークロア 12章—』（小学館、1995年）

- 大林太良著『仮面と神話』(小学館、1998年)
- 小川国治著『山口県の歴史』(山川出版社、1998年)
- 萩原秀三郎著『神樹—東アジアの柱立て』(小学館、2001年)
- 萩原眞子著『東北アジアの神話・伝説』(東方書店、1995年)
- 岡正雄論文「日本民族文化の形成」(『図説日本文化史大系』言叢社、1956年 所収)
- 岡正雄論文「二つの建国神話」(『日本古典学大系』月報13号、1958年)
- 岡正雄・江上波夫他著『対談と討論 日本民族の源流』(平凡社、1958年)
- 岡正雄著『異人その他—日本民族=文化の源流と日本国家の形成』(言叢社、1979年)
- 岡田英弘著、『倭国』(<中公新書>中央公論社、1977年)
- 岡田精司著『古代王権の祭祀と神話』(塙書房、1970年)
- 小西正巳著『古代の虫まつり』(学生社、1991年)
- 山上伊豆母著『古代神道の本質』(法政大学出版局、1989年)
- 佐々木高明著『日本文化の多重構造—アジア的視野から日本文化を再考する』(小学館、1997年)
- 千田稔編著『海の古代史—東アジア地中海考』(<角川選書>角川書店、1997年)
- 千田稔著『王権の海』(角川書店、2001年)
- 千田稔・上野誠他編『三輪山の古代史—大和王権発祥の地から古代日本の謎を解く』(学生社、2003年)
- 司馬遼太郎・上田正昭・金達寿編者『朝鮮と古代日本文化』(<中公文庫>中央公論社、1982年)
- 初期王権研究委員会編『古代王権の誕生1—東アジア編』角田文衛・上田正昭監修(角川書店、2003年)
- 白川静著『中国の神話』(<中公文庫>中央公論社、1980年)
- 白川静著『字訓』(平凡社、1987年)
- 末松保和論文「朝鮮古代諸国の開国伝説と国姓」(『青丘史草』1、笠井出版印刷社、1965年 所収)
- 鈴木武樹編集・解説「古代の朝鮮と日本—その建国伝承と関連性」(『現代のエスプリ』No.107、至文堂、1976年)
- 高木敏雄著『日本神話傳説の研究』(荻原星文館、1943年)
- 玉井幸助校訂『東関紀行・海道記』(<岩波文庫>岩波書店、1935年)
- 田中治吾平著『天照大神の研究—日本統一神教思想の発達の研究—』(霞ヶ関書房刊、1973年)
- 谷川健一論文「邪馬台国と鵠」(『東アジアの古代文化』大和書房、1975年 初夏号 所収)
- 谷川健一著『太陽と月—古代人の宇宙観と死生観—』(普及版 第二卷)日本民俗文化体系(小学館、1983年)
- 谷川健一著『青銅の神の足跡』(<小学館ライブラリー>小学館、1995年)
- 土橋寛著『日本語に探る古代信仰』(<中公新書>中央公論新社、1990年)
- 鳥越憲三郎著『古代朝鮮と倭族』(<中公新書>中央公論社、1992年)
- 筑紫申真著『アマテラスの誕生』(<講談社学術文庫>講談社、2002年)
- 上田賢治著『記紀神話の神学』(文明堂、2002年)
- 上田正昭著『日本神話』(<岩波新書>岩波書店、1970年)
- 上田正昭著『日本の神話を考える』(<小学館ライブラリー>小学館、1994年)

- 上田正昭・門脇禎二他著『三輪山の神々—大和王権発祥の地から古代日本の謎を解く—』（学生社、2003年）
- 海野一隆著『地図に見る日本—倭国・ジパング・大日本—』（大修館書店、1999年）
- 和田萃著『大系 日本の歴史 2 古墳の時代』（小学館、1988年）
- 山田信夫著『北アジア遊牧民族史研究』（東京大学出版会、1989年）
- 山口県社会科教育研究会編『山口県の歴史散歩』（山川出版社、1974年）
- 大和岩雄論文「太陽祭祀と古代王権（一）」（『東アジアの古代文化 特集 日本古代の太陽祭祀と方位観』大和書房、1980年 夏号 所収）
- 大和岩雄著『日本古代王権試論—古代韓国との関連を中心に—』（名著出版、1981年）
- 大和岩雄著『神々の考古学』（大和書房、1998年）
- 横田健一論文「建国神話にみる古代朝鮮と日本」（『歴史読本 特集 古代朝鮮と飛鳥王朝』新人物往來社、1984年 11号 所収）
- 依田千百子著『朝鮮神話伝承の研究』（瑠璃書房、1991年）
- 吉野裕論文「オホクニヌシ多名の由来—鉄の神話の流れ—」（『東アジアの古代文化 特集 古代の日本の新羅系文化』大和書房、1974年 秋号 所収）
- 吉野裕子著『隠された神々—古代信仰と陰陽五行』（人文書院、1992年）
- 覃光広他著『中国少数民族の信仰と習俗（上）』（伊藤清司監訳（第一書房、1993年）

#### 【韓国書】（日本語訳書を含む）

- 張籥根著『（韓国の郷土信仰）』（乙由文化社、1998年）
- 張秉吉著『（韓国固有信仰研究）』（東亜文化研究所、1970年）
- 崔昌圭著『（韓国の思想）』（瑞文堂、1975年）
- 崔吉城著『朝鮮の祭りと巫俗』（第一書房、1982年）
- 崔吉城著『韓国の社会と宗教—日本人による社会人類学的研究—』（亜世亜文化社、1990年）
- 崔南善著『兒時朝鮮』（東洋書院、1927年）
- 崔南善著『不成文化論』洪一植訳（日新社、1959年）
- 千寛宇論文「東アジアの古代文化 特集 日本の古代王権」（『韓国古代史研究の現況』大和書房、1976年 春号 所収）
- 千寛宇論文「韓国史の潮流—三国時代（抄）」長谷川守美訳（井上秀雄・旗田巍編者『古代日本と朝鮮の基本問題』学生社、1974年 所収）
- 趙芝薫著『趙芝薫全集 6』（一志社、1973年）
- 全浩天著『朝鮮からみた古代日本—古代朝・日関係史』（未来社、1989年）
- 鄭鎮弘著『（韓国宗教文化展開）』（集文堂、1986年）
- 任東權著『（韓国民俗文化）』（集文堂、1989年）
- 任東權著『韓日民俗文化の比較研究』（岩田書院、2003年）
- J.F.Bierlein 著『（世界の類似神話）』（、1996年）
- 金昌均論文「延鳥郎細鳥女伝説 由来」（『新興』創刊号、1929年 所収）
- 著『（日本の神話）』（、2002年）

- 金達寿著『古代朝鮮と日本文化—神々のふるさと—』（＜講談社学術文庫＞講談社、1986年）
- 金敬琢著『観念発達史』韓国文化史大系6、宗教哲学史（高麗大学校民族文化研究所、1970年）
- 金洪喆他著『韓国宗教思想史』（延世大学校出版部、1992年）
- 金貞培論文「劍鏡玉 古代 文化 社会」（『韓国古代 国家起源 形成』、1986年 所収）
- 金鍊淑著『比較神話学的 見地 建国神話 構造』（梨大大学院、1978年）
- 金思燁著『記紀万葉の朝鮮語』（六興出版、1979年）
- 金聖鐸著『開国神話 関 考察』（高大教育大学院、1975年）
- 金錫亨論文「三韓三国の日本列島内分国について」朴鐘鳴訳（井上秀雄・旗田巍編者『古代日本と朝鮮の基本問題』学生社、1974年 所収）
- 金錫亨論文「天孫降臨神話を通じてみた駕洛人たちの日本列島への進出」朴鐘鳴訳（井上秀雄・旗田巍編者『古代日本と朝鮮の基本問題』学生社、1974年 所収）
- 金錫亨・千寛宇・林宗相他著『古代日本と朝鮮の基本問題』朴鐘鳴・長谷川宇美他訳（学生社、1974年）
- 金元龍著『韓国考古学概説』（一志社、1973年）
- 金烈圭著『韓国 神話』（一朝閣、1977年）
- 金烈圭著『韓国神話の研究』泊勝美訳（学生社、1978年）
- 金烈圭・金泰坤・李相日他著『韓国の巫俗文化』韓国文化撰集シリーズ（、1998年）
- 金載元著『檀君神話 新研究』（正音社、1947年）
- 金庠基著『国史上 建国説話 検討』（建国大・学術誌5号、1964年）
- 金 氷著『神話 韓民族 太陽崇拜思想』（国語教育研究1号、1975年）
- 著『（韓国口伝神話の世界）』（、2005年）
- 李重宰著『高麗史』（明文堂、1995年）
- 李能和著『朝鮮巫俗考』（啓明具楽部、1927年）
- 李 淑論文「延烏郎 細烏女説話 —考察—韓日養蚕交渉史的 —」（『』＜>、1986年 所収）
- 訳『桓檀古記』全3巻（、2001年）
- 朴斗抱著『民族英雄東明王説話考』（暁星女大文学研究1号、1968年）
- 朴湧植著『韓国説話 原始宗教思想研究』（一志社、1984年）
- 編『（神話と歴史）』（ソウル大学出版部、2004年）
- 著『（世界の創造神話）』（、2002年）
- 申来鉉著『朝鮮の神話と傳説』（一杉書店、1943年）
- 著『（）（我神話）』（、2003年）
- ・ 著『 — ・ （古朝鮮・三国）—』（出版社、2002年）
- 論文「（神話の中の檀君）」（『』＜27>、2000年 所収）

- 蘇在英論文「延鳥郎 細鳥女説話」（『韓国説話文学研究』崇田大学校出版部、1984年 所収）  
 柳東植著『（韓国巫教の歴史と構造）』（延世大学校出版部、1975年）  
 柳東植著『風流道』（延世大学校出版部、1997年）  
 尹錫曉著『伽耶史』（民族文化社、1990年）  
 尹以欽著『韓国宗教研究1・2』（、1991年）

## 辞典・事典（韓国語辞典・事典を含む）—出版年代順

### （日本語）

- 『新編 大言海』大槻文彦著（富山房、1956年）  
 『ギリシア・ローマ神話辞典』高津春繁著（岩波書店、1960年）  
 『神話伝説辞典』（東京堂出版、1963年）  
 『古語大辞典』中田祝夫他編集（小学館、1983年）  
 『神話・伝承事典』バーバラ・ウォーカー（Walker,Barabara G.）著、山下主一郎他訳（大修館書店、1988年）  
 『動物シンボル辞典』ジャン=ポール・クレベール著、竹内信夫他訳（大修館書店、1989年）  
 『日本古代氏族人名辞典』坂本太郎・平野邦雄監修（吉川弘文館、1990年）  
 『『新宗教事典』井上順考他編（弘文堂、1990年）世界宗教大事典』山折哲雄編（平凡社、1991年）  
 『世界神話辞典』アーサー・コッテル(Arthur Cotterell)著、左近司祥子他訳（柏柏書房、1993年）  
 『世界シンボル大事典』金光仁三郎編（大修館書店、1996年）  
 『大英博物館 古代エジプト百科事典』内田杉彦訳（原書房、1997年）  
 『日本民俗宗教辞典』佐々木宏幹他監修（東京堂出版、1998年）  
 『中国神話伝説大事典』袁珂著、鈴木博訳（大修館書店、1999年）  
 『日本説話伝説大事典』志村有弘・諏訪春雄共編著者（勉誠出版、2000年）  
 『日本の神仏の辞典』大島建彦他編（大修館書店、2001年）  
 『世界神話大事典』イヴ・ボンヌフォワ編、金光仁三郎訳編（大集館書店、2001年）  
 『神道史大辞典』園田稔他編（吉川弘文館、2004年）  
 『世界大百科事典（改訂版）』（第15巻）加藤周一監修（平凡社、2005年）

### （韓国語）

- 『百科辞典』（、1962年）  
 『國史大辞典』理弘植編（大榮出版社、1976年）  
 『韓國學大百科事典』韓國學大百科事典編纂委員會編（乙酉文化社、1991年）  
 『（韓国宗教文化辞典）』（、1991年）  
 『（韓国民族大事典）』（、1991年）  
 『韓國文化（象徴辞典）』韓國文化象徴辞典編纂委員會編著（、1994年）  
 『韓國民俗大觀』高大民族文化研究所編（高麗大學校民族文化研究所、1995年）

- 『 (韓國民族文化大百科事典) 』 ( )  
 、1996 )
- 『 (世界宗教辭典) 』 、 ( ) 、1999 )
- 『 (新國史辭典) 』 • ( ) 、2003 )
- 『 (韓國民俗文化大事典) 』 ( ) 、2004 )
- 『 (地名大辭典) 』 ( ) 、2004 )
- 『 (世界神話辭典) 』 、 ( ) 、2004 )